平成18年度のまとめ

1. 防　護

平成18年度は、工事区域100m（事業計画約900m）のうち、完成断面20m、暫定断面80mを施工。平成22年度頃を目標に早急に事業を進め、背後地の安全を確保していく必要がある。施工方法については、既設護岸を出来るだけ切り下げないで安全を確保する方法に改良する。

2. 環　境

石積部への潮間帯生物の定着は、着生の初期段階にあると考えられるが、施工後約1ヶ月の短期間で、種類数、着生密度ともに一定水準の着生が確認され、順調に生物の定着が進むと考えられる。
地形や底質（粒径）といった周辺域に対する環境影響要因についても、現時点では大きな変化は確認されなかった。

3. 利　用（景観を含む）

現地見学会や勉強会を通じた委員からの指摘を踏まえて、改良・検討を加えている。

上記より、平成18年度は、防護の進捗（背後地の安全確保）、環境の保全、利用について一定の成果を得られたものと考えられる。

平成19年度へ向けた護岸検討委員会の取り組み

H17・18年度施工とモニタリング結果

● 防護

100m区間の施工

（20m完成、80m暫定）

● 環境

・潮間帯生物の定着、及び石積部の生物の利用が確認された。

・海底地形・底質に大きな変化はみられなかった。

● 利用

完成形の景観は殺伐感を感じさせる。

H19年度：施工

考　察

● 防護：既設護岸切り下げによる施工方法には安全面で不安あり。

●環境：現時点では特に問題なし。生物の着生促進に工夫する。

●利用：景観の殺伐感の緩和。利用面での工夫が必要。

公開調査、勉強会、現地見学会等の実施

意見・指摘等

結果の検証、効果・改善点の整理

断面形状の検討

● より良い工夫、より良い断面

防護：施工方法の改良による途中段階の波浪に対する安全の確保

環境：のり先を乱積にすることにより、生物の定着と利用を促進

利用：被覆方法の工夫によるなだらかな断面形状

石の間隙への植栽により殺伐感を緩和

管理用通路の有効利用→曲線的な遊歩道の整備

自然観察デッキやシンボルスポット等のバリエーションの配置

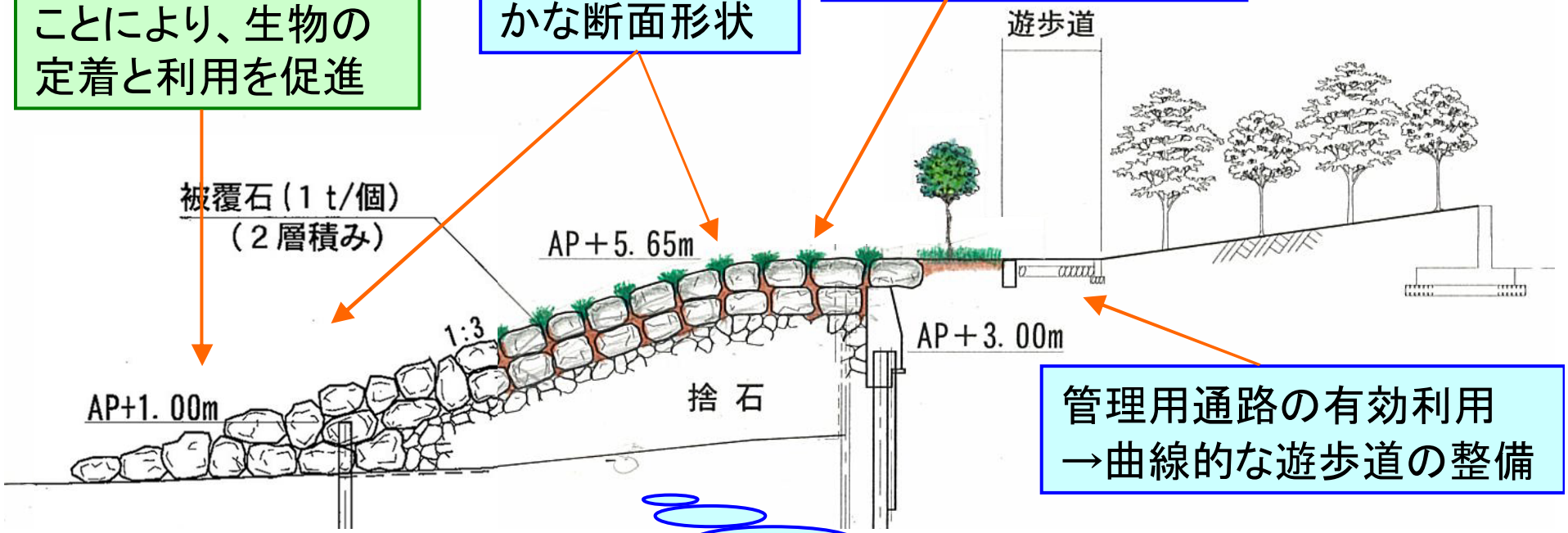
より良い工夫、より良い断面へ

施工方法の改良による途中段階の波浪に対する安全の確保

のり先を乱積にすることにより、生物の定着と利用を促進

被覆方法の工夫によるなだらかな断面形状

石の間隙への植栽により殺伐感を緩和



管理用通路の有効利用
→曲線的な遊歩道の整備

自然観察デッキやシンボルスポット等のバリエーションの配置